

<要約>

本研究では母娘関係に焦点を当て、筆者の心理臨床体験に基づく「ナルシシステック・コントロール」、「マゾヒスティック・コントロール」の理論的裏づけをはかるとともに、母娘関係から見た諸研究の現状をもとに、新たに課題となってきた幾つかのテーマについて考察し、それらに通底する母娘関係の今後の展開について言及している。

第1章では母娘関係に関連する諸研究の概観から、愛着や世代間伝達、アイデンティティといった従来の心理学研究の現状を確認している。また母娘関係に葛藤を抱えたクライアントとの臨床実践に基づく研究状況についても言及している。

第2章では Jung の分析心理学的な観点から見た母娘関係にかかわる諸研究を吟味検討し、次にフェミニズムの観点から母娘関係にかかわる諸問題について、Hirsch (1989/1992) を援用しつつ、女性の発達という観点から議論している。

第3章では、1997年の筆者の著書『母を支える娘たち』で紹介した上記の「ナルシシステック・コントロール」と「マゾヒスティック・コントロール」の発想の経緯と理論的肉付けを試みている。臨床的な経験に基づく両概念が、従来のナルシシズムとマゾヒズムの研究の流れの上にもどのように位置づけられるかを検討し、さらに両コントロールの不幸な組み合わせを「共依存」という形で読み直し、臨床への提言を行っている。また、第5章でそれらを現代的な視点から論じる準備を行っている。

第4章では、上記の両概念の発想の根拠となった筆者の事例を取り上げるとともに、母娘関係にかかわる様々な主題を持つ臨床事例について報告している。それらは母からの「自立」「妊娠」「介護」といったライフイベントに関連する事例であり、さらに現代的な主題である「セクシュアル・マイノリティ」の事例を含む臨床実践である。これらの主題は先達の諸事例のメタ分析や、母娘に関連する漫画、小説、自伝的エッセイなどの諸作品の分析によってさらに明確化、前景化され、次の第5章において、母娘関係にかかわる現代的課題として扱う主題を提供している。

第5章においては、科学技術の進歩による母娘関係にかかわる現代的な諸問題を、「不妊治療」「リプロダクティブ・ライツ」「セクシュアル・マイノリティ」といった具体的な切り口で掘り下げている。とりわけ身体性に深く関連する「妊娠」「出産」をめぐる生殖補助医療の技術的進歩は、母親の在り方や心構えを大きく変え、それに対応した形で心理士(師)が関わる際の知識や倫理的態度も専門化されるようになってきた。また、セクシュアル・マイノリティにおける「子を持つ権利」や、子供の側の「出自を知る権利」といった諸問題に

についても、臨床心理学的に考察すべき課題として提起されている。併せて第5章では、第3章の延長上で、発達障害を疎外しがちな学校風土の問題についても言及している。

こうした現代的な諸問題は、男女という性別二元論を超えようとする Haraway (1985/2001) や Butler (1990/2018) によって予見されていた多様な社会の到来を特徴づけるものではあるが、同時にそれは鶴見和子や河合隼雄によって「マンダラ」的思考として語られていた共生の思想にも通じるものである。

そこで第6章では、マンダラをめぐる両者の交流と思想的発展から、未来に向けて我々が汲み取るべきものは何か、について改めて吟味検討を行っている。それは地球上における共存と共生の思想であり、なおかつその中でダイナミックな変容をもたらす契機が何か、という問いかけをはらんだ発想である。もちろんこれは、心理臨床を生業とする者にとって、個人レベルで心理療法論と通底する発想でもある。

最後に反省と今後の展望について述べている。(以上 1499 文字)